

2025 愛知U12 インテグリティ講習

“マルトリ”から子どもを救う！ バスケットボールに関わる大人のインテグリティ

豊田 則成

認知行動コーチ

一般社団法人コーチング心理学会 認定: CBC-B298



毎日誰かしら殴られてたし、試合中とかも……。本当にどれだけ殴られたか
ってくらい殴られた。私がキャプテンだったのもある。……。髪の毛引っ張ら
れたり、蹴られたりもした。……（顔）が殴られすぎて青くなって。……血
が出たことも。……でもその先生のこと、（今も）好きだし……。 （当時）
私のことプレイヤーとして信頼してくれてるなという感じもすごくしてた
し、私の助けになろうともしてくれていた。……みんな嫌いじゃなかった
（でも）みんな、本当に先生のこと怖くて。……（酷い指導者に関して言う
と）DV 被害者の心理と似ていて、アメとムチではないけど、愛情と虐待の
両方を感じてた⁵。

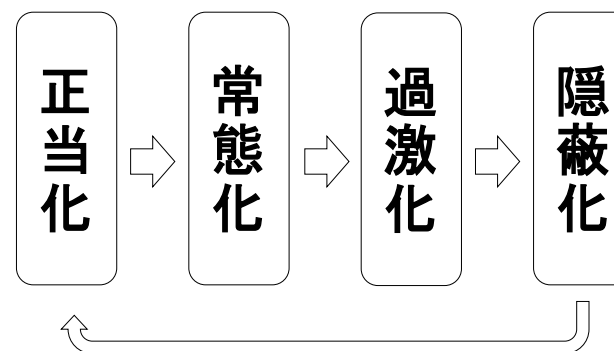
「数えきれないほど叩かれて」

日本のスポーツにおける子どもの虐待

何十年間も、日本の子どもたちは、トロフィーやメダルの獲得のためという名の下に暴力を振るわれ、暴言を浴びせられ続
けてきた。日本のスポーツには、体罰の歴史がある。今回の新調査により、学校や地域からトップレベルまで、スポーツを
する子どもたちが暴力や性虐待、暴言の被害に遭っており、生涯にわたる心的外傷を受けていることが明らかになった。

「『数えきれないほど叩かれて』：日本のスポーツにおける子どもの虐待」は、オリンピックやパラリンピアンを含む、
800人以上（50人以上のインタビュー調査と、オンラインアンケート調査での757人の回答）について、子どものときのス
ポーツの体験を調査してまとめた。オンラインアンケート調査では、少なくとも50競技、45都道府県での経験についての回
答があった。顔を殴られたり、蹴られたり、バットや竹刀で殴られたり、水分補給を禁じられたり、首を絞められたり、
ホイッスルやラケットでぶたれたり、性虐待や性的嫌がらせを受けたなどの訴えがあった。近年、日本で改革が行われてい
るものの、このような虐待が「当たり前」のこととされ、選手がアクセスできる通報相談窓口や救済措置が整っておらず、
日本の学校スポーツから競技団体傘下のスポーツやトップレベルのスポーツまでアカウンタビリティ（責任追及）が不十分
であることを、本調査は明らかにした。これにより、加害者である指導者が、他の選手にも危害を加え続けている。

日本が2021年7月に東京で開催されるオリンピック・パラリンピックに向けて準備を進めているいま、日本の現状に対する
世界の関心は、スポーツをする何百万もの子どもたちを守るために日本国内の法制度そして世界の政策を変える、またとな
い機会となる。



大人のインテグリティが欠如すると生じる負のスパイラル

現行 学校教育法 第11条

学校長及び教員は、教育上の必要があると認めるときは、監督官庁の定めるところにより、学生、生徒および児童に懲戒を加えることができる。但し、体罰を加えることはできない。

強いチームによくある光景

あるチームでは、強い圧力をかける指導が横行していました。

ベテランと呼ばれる年代の指導者が、子どもの行動を常に監視し、少しでも枠から外れるような行動をとると大声で怒鳴ったり、力づくで行動を静止したりすることを繰り返していました。その指導は、チーム全体に浸透しており、若い指導者たちも「こうすれば、子どもたちは言うことを聞く」といった間違った成功体験を積んできました。また、審判に対して過剰なクレームを呈することが試合に散見されました。

子どもたちの表情に笑顔はなく、指導者に怒鳴られることで頻繁にパニックに陥る子どもや、毎回の練習へ「行き渋る子ども」が続出していました。ところが、指導者による苦しさを子どもたちはなかなか訴えることはできません。「行き渋る」ことは「親の甘やかした」と保護者が責められることもあります。保護者にとってこのようなチームは我が子を「人質にとられている」現場であり、申し立てることさえできないまま、時間だけが過ぎていきました。

すると、子どもたちは、強い圧力をかけなければ動かなくなっていました。これでは、子どもたちは楽しくないばかりか、本来あるべき自主性が育まれません。

暴言、ハラスメントの島原中央・女子バスケ部監督 1年間の指導資格の停止処分に【長崎】

2025年03月28日 19:08

島原中央高校女子バスケットボール部の男性監督が、1年間の指導資格の停止処分になったことがわかりました。島原中央高校によりますと、3月13日に女子バスケットボール部の男性監督がJBA＝日本バスケットボール協会から技術指導ができない1年間の資格停止処分の通知を受けたと学校に報告しました。JBAは13日付けで高校バスケットボール部の指導者が複数の部員に対し、人格を一方的に否定するなどの暴言行為やハラスメント行為をしたとして登録資格を1年間停止したと発表しています。島原中央高校はその後、部員の保護者にオンライン説明会を開きましたが、生徒や保護者の混乱を避けるため処分の理由は明らかにしていません。学校によりますと男性監督は処分の内容に一部事実誤認があるとして、JBAに申し立てをしたということです。男性は3年前に監督に就任し、2023年と2024年の2年連続で県代表としてウインターカップに出場しました。

指導の現状【各方面への傾聴から】

- 子どもへの人権侵害
- リスペクト精神の欠如
- 審判への過剰クレーム
- 強ければいいという勝利至上
- マルトリートメントの横行

チャイルド・マルトリートメント

□ 世界保健機関(WHO)

□ 18歳未満の子どもに起こるあらゆる種類の身体的・心理的・性虐待とネグレクト、商業的またはその他の搾取を行うこと、さらに責任、信頼または権力の関係の文脈において、子どもの心身の健康・発達・対人関係などに害をもたらすこと

ネグレクトに類似した指導

- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| □ 励ましや賞賛などをしない | □ 取り組むべき課題を放置する・自立と自律を誤認する |
| □ 特定の子の指名を避ける | □ 支援が必要な(下手な)子の指導を他者に丸投げする |
| □ 支援が必要な(下手な)子の合理的配慮を行わない | □ 見捨てる言葉「勝手にすれば」「さようなら」を吐く |
| □ 必要な指導準備を怠る | |

児童虐待の予防等に関する法律

□ 児童虐待予防法

- ① 身体的虐待 → 身体的マルトリ
- ② 性的虐待 → 性的マルトリ
- ③ ネグレクト → ネグレクト
- ④ 心理的虐待 → 心理的マルトリ

心理的虐待に類似した指導

- 威圧的・高圧的な指導、力で押さえ込む指導
- 子どもが自信をなくすような強い叱責
- 子ども的人格を尊重しない言動
- 子ども主体的な行動を妨げるような指導

指導者の【マルチ】

- | | |
|------------------------------|--------------------------|
| ① 大声で怒鳴る・罵倒する | ⑥ 子どもを無視する・目を合わせない |
| ② 子どもの人格を否定する | ⑦ 子どもとの対話を怠る |
| ③ ペナルティーで子どもを服従させる | ⑧ 子どもの要望に対応しない |
| ④ スポーツをする機会を奪う | ⑨ 指導計画を立てずに現場に立つ・場当たりの指導 |
| ⑤ 他の皆の前で子どもを晒しものにする・他者と比較をする | ⑩ 指導者自身の取り組みを振り返らない |

- 事例Aくん：男子 年齢不詳
- 分析の焦点『バスケットボール指導場面において暴言暴力を受けたことにより大きな心理的ダメージを受けた経験を有する』
- 語りの中に登場する①コーチ、②両親、③仲間・友人、についての語りから社会的相互作用(心のやりとり)に着目してみよう

議論を続けるための視点

- 『スポーツ指導場面において受けた暴言暴力はどのような影響を及ぼすのか』という素朴な疑問を持ちつつ、事例に注目する
- 『なぜ、そうならざるを得ないのかな？』
- 『なるほど、そうならざるを得ないよね！』
- 『だったら、こうすればいいのでは？』

Aくんの概要

これまでに、U12バスケットボール指導において暴言暴力は「常態化」していた。今も尚、根絶には程遠い。

Aくんは暴言暴力を受け続けた。「すべては自分が悪い」と自責の念に駆られ、「指導してもらえないのでは」と常に不安を募らせた。Aくんは腰椎分離を発症し、練習を休みがちになる。それでも尚、暴言暴力を受け続けたことから、「もういいや」と気持ちが切れた。練習にも行かず、不登校になり、結局、退部を選んだ。

事例(1/10)

コーチと初めて出会ったのは、小学3年の頃で「元気いいね。うちのチームに入らない？」と声をかけられた。強いチームのコーチであったことは以前から知っていたので「正直、とても嬉しかった」。しかし、実際に入ると暴言暴力は当たり前。そんな中でも「自分はできると思っていたかった」。

事例(2/10)

「コーチから大きな声で怒鳴られて叩かれるのはミスをした自分が悪いと思っていた」でも、怒鳴られるのも叩かれるのも、ただただ怖かった。恐ろしかった。痛かったから「ものすごくショックで結構落ち込んだ」「コーチはいつも不機嫌だったし、今日も怒鳴られて、また叩かれるのかもしれないと思うと、常にビクビクしていた」

事例(3/10)

何よりコーチに「見捨てられるんじゃないか」と不安に思っていた。怒鳴られ、叩かれ続けていると「指導してもらえないかも」と不安になった。実際、コーチは「なんでミスするの！」「もうやめてしまえ！」とまで言い放っていた。「僕は期待に応えられないんじゃないか」「とにかく、焦ってばかりいた」と、Aくんは振り返った。

事例(4/10)

「ミスは絶対にしちゃイケナイと思っていたけど、そう思えば思うほど、身体が固くなって、却って動きもぎこちなくなっちゃって」「このままじゃ、試合に出してもらえない」「焦るばかりで、どうすればいいのかわからなくて」「試合に出れないのは絶対に嫌だった」「だから、怒鳴られ、叩かれても我慢しなくちゃ」と思っていた。それが当たり前だった。

事例(5/10)

「強いチームは、どこもコーチから怒鳴られながら、叩かれているのが当たり前だと思っていた」「親も同じことを言っていた」「叩かれるのは嫌だったから辞めたいとも思ったけど、実際辞める勇気がなくて」「途中で辞めることで、自分が弱いと思われたくないから」「だから、親には何も言わなかった。だって心配するから」「親には心配させたくなかった」

事例(7/10)

かつて、父親には「そんなに他人の目を気にしなくてもいい」と諭されたことがある。母親には「本当の自分を見せないようにしているよね」と言われた。親は心配したが、どうすればいいか分からなかった。祖父の家に預けられたことが多かった。「お父さんとお母さんは忙しいから仕方がない」と思った。自分が嫌で、母親に泣いてすがりついた。「もう嫌だ！もう嫌だ！」と母親にしがみ着いたことも。

事例(6/10)

Aくんは、ある日、学校に行けなくなった。朝起きて、顔を洗うために鏡を覗いたら「自分が物凄く醜い姿に見えてしまった」。何度も何度も顔を洗って、頬が赤く擦り切れて腫れ上がり、血が滲み出て、やめなかった。母親が「何しているの。もうやめなさい」と制止してようやく踏みとどまったが涙がボロボロ出てきて止まらない。「これじゃ学校に行けないよ！」と叫んだ。

事例(8/10)

毎回、仲間の皆が練習に向かう時の足取りが重かった。「きっと誰かが怒鳴られ、叩かれる」「今日はお前が殴られろ？」「自分じゃなければいいのに」と練習前に思っていた。「試合に負けようものなら必ず誰かが叩かれる」「負けたら全部僕らのせい」「だから負けちゃダメだと必死だった」「怒られるのが怖かった」

事例(9/10)

周囲の眼差しが突き刺さる感じがした。「練習を休むなんて仲間にすごく迷惑をかけている」「自分が醜くて許せなかった」「本当の自分を隠したかった」しかも「自分の身の周りで起きていることの全てが自分のせいで、自分が悪いのだ」と思い込んでいた。それに加えて、「本当の自分を誰にも見せられない」と強く思った。

【さあ、皆さんで考えよう！】

□ この事例は『スポーツ指導場面において受けた暴言暴力はどのような影響を及ぼすのか』という素朴な疑問の下、Aくんの受けた暴言暴力の経験を人との関わりに着目し議論している。その結果、『心の安全地帯を求めていたものの、その安全を確保できず、途方に暮れてしまい、手探りを続けるものの、意欲を失うに至ってしまった』といった深刻な影響を及ぼしていた。

- コーチに認めてもらいたい、指導してもらいたいと【愛着の希求】がベースにあった。
- しかし、暴言暴力によって【愛着不安】が激化していく。(乖離不安)
- 【他者志向】仲間にも本当の自分を見せない。
- 【自己原因】悪いの自分だと思い込んでいた。
- 暴言暴力に対して【恐怖心】を抱き、【苦痛を避けたい】と思い続けていた。
- そのような中だから【自分を見失う】ことになり、【焦燥感】を募らせていった。
- そこでは、暴言暴力を避けたいがため【勝利至上】を引き受けざるを得なかった。
- Aくんはもがき苦しみながら、結局、【意欲を喪失】してしまい、精神的破綻に陥った。
- コーチの暴言暴力がAくんの『心の安全地帯』を崩壊させてしまった。

事例(10/10)

母親に車で送ってもらって、学校に到着するも、トイレに直行して、そこから出られない。「こんな自分を他の友だちに見られたくない」「休んでいることが皆に申し訳ない」「自分が情けない」と自分を責め続けた。明らかに精神的な不調が続いたので、母親と共に精神科を訪れた。「練習は休んだ方がいい」「学校も」「しばらくゆっくり過ごそう」とすすめられた。

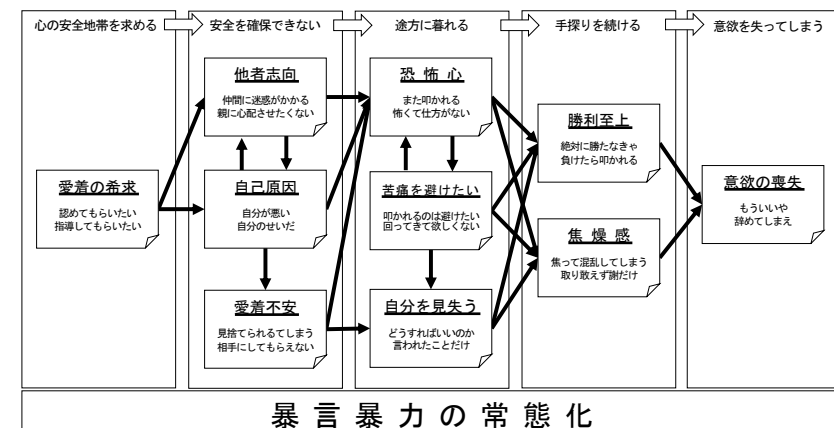


Fig. 1 暴言暴力によって生じる愛着不安の影響

【マルトリートメントの影響 / 愛着の観点から】

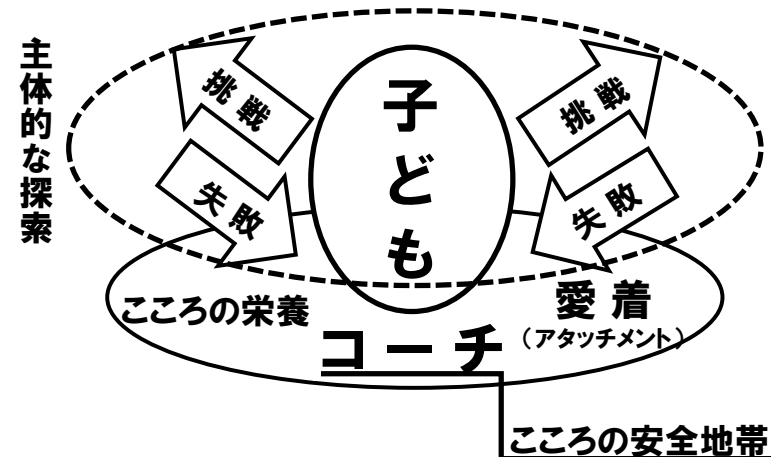
□ そもそも愛着（アタッチメント）とは、子どもと母親との関係において見出された概念である。一方、特定の重要な他者（ここではコーチ）との信頼関係を深めることは、子どもが心理的安全性（安心感）を確保することにも通じている。

□ Aくんの場合、コーチによる「暴言暴力の常態化」の中で、「愛着不安（attachment anxiety）」を生じさせてしまい、「心の安全地帯」を崩壊させてしまっていた。マルトリートメントは、人格の根幹を崩壊させてしまう恐れがある。

□ コーチから受けた暴言暴力は、当時のみならず、その後も、永くAくんを苦しめ続けてしまうことにもなっていた。心の傷は、時間差で症状悪化を招く。

□ 本来、コーチの正常な愛着行動によって、子どもたちは、スポーツを豊かで健全な経験として将来に繋いでいくことができるのかもしれない。

□ だからこそ、マルトリートメントは決して許されてはならない…。



アタッチメントのつくり方

□ 目を合わせる

□ 笑いかける

□ 語りかける

□ 触れ合う

□ 感謝を伝える

□ 努力や過程を認める



自分のことを
気にかけてくれている

↓
自分のことを
分かってくれている

↓
安心して
挑戦することができる

